知る者が行なうことのできる解釈である。このことは、単に言語的アプローチを意味するばかりではなく、様々な修辭法を通して神の意志を理解することができることを意味している。

これらの点を踏まえながら、タバリーは最良のクルアーン解釈へ到る方法として、解釈や注釈に関する明快な証拠の必要性を論じている。その証拠として彼に重要視されたのが「伝承」であった。タバリーのコンテキストにおいて、この伝承の語の範疇は、預言者ムハンマドのハディースと彼の教友や後継者たちのアサル(ahar)が含まれる。このアサルはムハンマドによる伝承ではないが、前代までのクルアーン解釈として重要な情報を提示していた。このように、タバリーは伝承や言語によるアプローチを駆使しながらクルアーンを解釈しようとしたのである。

マイモニデスにおける

イスラーム思弁神学者の神学論議

神田 愛子

本発表は、中世の代表的ユダヤ思想家、マイモニデス(一三五一—二〇四)が、ユダヤ・アラビア語で執筆した名著『迷える者の道案内』において、イスラーム思弁神学者(ムタカツリムーン)の議論をどのように理解し、評価していたかにつき考察することを目的とする。彼は第一部七十三章において、イスラーム思弁神学者が論証の基盤として用いた十二の前提につ

いて外観した上で、イスラームの教義に関する彼らの論証に関して、世界の時間的生成(七十四章)、神の唯一性(七十五章)、神の非物質性(七十六章)の三つの教義に絞って各章の中で論じている。十二の諸前提の一から九は、主にアシュアリー学派の原子論に負っているようであるが、中世思想史の観点から見ると、ほとんどのユダヤ学者は原子論を受け入れておらず、マイモニデスも七十一章で、原子論は後代の(つまり、古典ではなく)哲学者により偽であると論証されたと述べていることから、彼自身は原子論を支持していたわけではないと推察できる。

マイモニデスは七十一章の中で、ムタカツリムーンの議論は、その下位の議論は異なるにせよ、どれも方法として同じであって、想像による議論を知性によるものと称していると論じている。世界の時間的生成についての彼らの議論は、論証、弁証法、詭弁的弁論の違いを知らない者を除けば、疑問を伴う説得力のない論証であると批判する。彼は、正しい論証の方法とは、哲学者が世界の永遠性の理論を築いた方法をとおして、疑問が残らないように教義を確立することであると断言する。これは、彼自身が世界の永遠性を信じていたからではなく、世界の永遠性と世界の時間的生成の議論をすることなく、神の存在、神の唯一性、神の非物質性について論証することこそが、有効で確実な方法であると彼が考えていたからである。(注…)なぜ彼が世界の永遠性の議論を回避するのかにつき、同じ箇所では以下のように説明する。もし世界が時間的に生成されたのであるならば、必然的にそれを創造した存在が必要となる。

一方、もし世界が永遠であるならば、実体と作用因のない、一つの永続的で変化しない存在が必然となる。結果的にどちらの場合も、神の存在、唯一性、非物質性が明らかになるのである。それこそが私自身の望むことである。」

哲学者の議論の方法について、マイモニデスは第二部一章から三十一章にかけて述べており、一章では、第一部七十三章と同様、哲学者の論証の基盤となる二十五の諸前提を、アリストテレスの自然学と形而上学の議論に基づくものとして掲げている。ここで内容の詳細について言及することは控えるが、彼自身が本当に論じたかったと思われる議論は、本箇所において論じられたものと推察され、その意味において、今回取り上げた箇所を正しく理解するためには、第二部の議論について丹念に調べる必要があると考える。

最後に、方法的にはカラムのな議論を展開するマイモニデス自身がムタカッリムと言えるかどうかについて、レオ・シユトラウスは「マイモニデスの議論とカラムの議論を分けるものは、知性と想像の根本的な違いについての彼の主張であって、彼は、ムタカッリムは想像と知性を取り違えていると断言している。すなわち、自然の事物と調和する明瞭な前提が必要であるにも関わらず、カラムは真実だからではなく、教義の証明がし易いことで選んだ恣意的な前提から始めていると、彼は主張している」(Leo Strauss, "The Literary Character of the *Guide for the Perplexed*," in *Persecution and the Art of Writing*, Chicago and London: University of Chicago Press, [1952] 1988, p. 40)と述べており、純粹に哲学的な方法論に

基づくことを旨としつつ聖書に基づく結論を是としたマイモニデスは、この意味ではムタカッリムとは言えないとも結論付けることが出来るであろう。

スーフィー文学における

シンボリズムとナータ・ヨーガ

榊 和良

『マドゥマラータイ』は、ヒンディー・スーフィー・カーヴィヤと呼ばれる一方で、インド・スーフィー・ロマンス叙事詩とも呼ばれるジャンルに属する一五四五年に書かれた東部ヒンディー方言(アワディー)の詩物語である。ジャンル名が象徴するように、モティーフやプロットの多くを先行するバヴァブータイの『マラータイマダヴァ』というサンスクリット戯曲や『カターサリットサーガラ』に収められたインドの説話、同じ東ヒンディー方言で著されたジャーエスイーの『パドマーヴァタイ』やクトゥバンによる『ムリガーヴァタイ』の影響を受け、インドの伝統的な物語・語りのスタイルと、ペルシア語の伝統的なマスナヴィー(詩物語)のシンボリズムと作為性を組み合わせた形を特徴とするとされる。

マンジャンは、主人公の王子マノーハルと王女マドゥマラーティーが「愛の道」をたどる物語を、「ラージャ・ラサの物語」「甘露(アムリタ)の物語」と呼んだ。この時代、このジャンルの物語詩が好んで依拠したヨーギンの修道論は、ペルシア語の